

演題番号：C9

中枢性尿崩症の診断における尿浸透圧の重要性とデスマプレシン点眼時の注意点に関する考察

○鍋谷知代¹⁾，金城綾二¹⁾，市田千尋¹⁾，藤田均史³⁾，鳩谷晋吾^{1) 2)}

¹⁾ 大阪公大 獣医臨床センター，²⁾ 大阪公大 細胞病態学研究グループ，³⁾ さやま池動物病院・大阪府

1. はじめに：中枢性尿崩症 (CDI) は重度に尿比重が低下する疾患で、腎性尿崩症 (NDI)、心因性多渴症 (PP) との鑑別が必要であり、修正水制限試験後のバソプレシン (AVP) 負荷試験で尿比重と尿浸透圧が共に上昇する。また、CDI 症例はデスマプレシン (DDAVP) で治療される。今回、AVP 投与後に尿比重が著明に上昇せず、DDAVP 点眼治療の効果が安定しない CDI 症例を経験したため、尿浸透圧測定的重要性と治療時の注意点について検討した。

2. 材料および方法：症例はチワワ、8歳齢、避妊雌。著明な多飲多尿を呈し、原因精査を目的に当センターを受診した。血液検査で血漿浸透圧が基準値上限だった。X線検査と超音波検査で異常はなく、尿検査で著明な尿比重の低下が見られ、尿浸透圧は基準値下限だった。頭部MRI検査で頭蓋内疾患を除外した。

3. 結果：尿崩症とPPの鑑別のため、修正水制限試験とAVP負荷試験を行った。試験開始時の体重、Na値、尿比重、尿浸透圧を測定し、1.5～2時間毎に膀胱内の尿を空にして同様の項目を測定した。4時間後に体重が3%減少し、かつNa値が上昇したため修正水制限試験を終了し、結果よりPPを除

外した。その後、AVPを投与し、30分、60分、120分後に尿比重と尿浸透圧を測定した。AVPの投与前と比べ尿比重の上昇はわずかだったが尿浸透圧が2.6倍に上昇し、CDIと診断した。DDAVPの点眼を行い症例の多飲多尿は改善した。その後、異なる素材の点眼瓶を使用した際に再度多飲多尿を呈したが、従来の点眼瓶に変更し症状は改善した。

4. 考察および結語：尿比重は、複数の成書でAVP負荷試験における単独の判断基準として記載される。しかし、本症例はAVP投与後の尿比重が著明に上昇せず、尿浸透圧の優位な上昇により診断可能だった。一部のCDI症例は、AVP投与後に尿比重が変化せず、尿浸透圧のみが上昇するとの報告がある。尿比重単独の測定は誤診に繋がることもあり、尿浸透圧を同時に測定すべきである。また、DDAVPはガラス瓶に入った原液をポリエチレン点眼瓶に分注し処方した。ポリプロピレン点眼瓶に変更した際、多飲多尿が悪化したことから、容器内面に薬用成分が付着、また、容器の素材により付着率が異なる可能性がある。DDAVP点眼を行う際、点眼瓶の素材によって有効性が変化することが考えられ注意が必要である。